

日本の教育は、長年にわたり、一つの教室に40人ほどの人数が入った一斉授業を基本としてきた。これは、今も変わらない。変わったのは、一つの学級の人数が30人から35人と減ってきていることである。

この方式は、知識や技能を効率よく教えるのには適している。ある意味、見事な方法である。それでも、授業についてこれなくなったり、わからないままでもいたりする子どもが出てしまう。それを、できるだけ個別指導の場を設けて、何とか取り残さないように努力してきた。

思考力・判断力・表現力を育成するとなると、どうだろうか。一斉授業では、困難が生じる。かなり無理がある。授業者は、様々な手だてを講じて何とか一人に一人に対応しようとするが、効果を上げるのはむずかしい。

コロナ禍により、予定よりも早く一気に教育のICT化が進んだ。もはや教室に行くと、生徒の机にはタブレットがあり、黒板の脇にはプロジェクターがあるのが、日常の光景になっている。そのタイミングで「個別最適化」というキーワードが出てきた。本来は、「個別最適化と協働的な学びの一体化」なのだが、「個別最適化」が前面に出ている。

一斉授業と個別最適化、この2つの言葉だけを見ていると、相容れないもの、矛盾したもののように感じられる。個別最適化には、学習の個性化と指導の個別化という側面がある。さらに一斉授業からは遠い存在のように思えてくる。

30年近く前だったが、個に応じた指導、個を生かす指導、個が生きる指導などのキーワードのもと、学習の個性化と指導の個別化が叫ばれたことがあった。まだ若かったが、コース別学習や学習カルテに取り組んだ。やってみてわかったことは、続くわけがないということである。一斉授業の形態では、持続可能とはいかないと感じた。

再び、同じようなことが言われるようになった。ただし、以前とは状況が違う。タブレットをはじめとしたICTである。今回は、タブレットなどを活用して、個別最適化を実現しようということなのだろう。できそうな気はする。だが、これも容易なことではない。

時代が教育に求めているものと、一斉授業とがマッチングしているのだろうか。だいぶ前からずれているのだが、一斉授業の方を変えないままきているのが現状である。一部の学校では、一斉授業ではない教育を取り入れており、効果を上げている。しかし、これらの実践が、これから全国に広まるのかというと、そうはならないだろう。

当分の間は、一斉授業が主流のままであろう。そうであるならば、授業者の工夫や裁量に委ねられる側面が大きいことになる。授業は、容易ならざるものではあるが、授業者次第だと考えれば、やりがいも大きい。一斉授業のよさを生かしつつ、どのくらい個に応じることができるのか。授業者の腕の見せ所である。